



スチュアート・ホールのネオリベリズム革命論

著者	牛渡 亮
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第481号
URL	http://hdl.handle.net/10097/60749

スチュアート・ホールのネオリベリズム革命論

東北大学大学院文学研究科人間科学専攻

牛渡 亮

本論文は、イギリスの文化研究者スチュアート・ホールの青年期から晩年にいたるまでの思想を「ネオリベリズム革命論」という視座から論じたものである。このなかで、ホールが青年期に彫琢した経済還元論批判に基づく文化政治論を、生涯一貫して追求していたことを論証した。また、1970年代以降のホールは、彼が「ネオリベリズムの長きにわたる行進」と呼ぶ、「ネオリベリズム革命」の連続性を丹念に追いかけていたことについても論証した。そのうえで、ホールが「ネオリベリズム革命」と呼ぶ現象の内実を明らかにした。

日本において、ホールは当初メディア研究者として、その後はカルチュラル・スタディーズの創始者としてよく知られている。しかし、彼の思想の全体像はあまり知られていない。これは、ホールの研究スタイルの特殊性に起因する。ホールは生涯を通じて単著を著さず、大小様々な媒体に断片的な論考を数多く発表した。このことが、彼の思想の総体的把握を困難にしている。本論文では、「ネオリベリズム革命」という晩年のホールが提起した概念を軸に、彼の多様な研究をひとつの連続性のなかで結びつけ、通時的に論じている。こうした視角からホールの思想を扱った先行研究はないため、本論文の成果は社会学に対して独自の貢献をもたらすものである。

本論文は、7つの章と1つの補論によって構成されている。以下では、それぞれの概要を述べる。

序章では、本論文全体の目的が示される。ホールは、2010年にイギリス首相となったキャメロンを、サッチャー、メージャー、ブレア、ブラウンらが押し進めてきたひとつの共同プロジェクトである「ネオリベリズム革命」の新たな担い手として位置づけている。本論文は、こうした視角に基づいて、分析が進められる。

第1章では、ホールの生い立ちを確認し、若き日のホールが「教条主義的マルクス主義」と「伝統的文化論」というふたつの伝統と格闘するなかで、みずからの文化政治論を彫琢したことを示した。そのうえで、青年期のホールによる「無階級社会論批判」を検討した。そこから、ホールの文化政治論にとって、消費資本主義社会における文化的上部構造と経済的土台との相互浸透的關係を明らかにすることがその核心であることを論証した。

第2章では、1970年代にホールが提起した議論を「モラル・パニック論」として整理し、その意義を検討した。その結果、ホールはモラル・パニックを戦後の「合意」に基づく社会から、ネオリベラルな「強制」に基づく社会へと転換していく徴候と捉えていることを明らかにした。

第3章では、1970年代から80年代にかけてホールが展開したサッチャー批判を「サッチャリズム論」として整理し、その内容を検討した。ホールは、保守党支持層だけでなく、サッチャリズムによって冷遇されているはずの労働者階級の人々までもがサッチャーを支持するのはなぜかという問いを軸に、サッチャリズム分析を行った。結果的にホールは、サッチャリズムが「退行的近代化」と「権威主義的ポピュリズム」というふたつの文化戦略によって階級横断的な支持を獲得することができたという解答を提示している。

第4章では、1980年代末にホールが開始した「新しい時代」プロジェクトに着目し、彼の考える「新しい時代」における左翼の刷新とは何かを分析した。ホールは、サッチャリズムに占有されている文化領域におけるヘゲモニー闘争の重要性を強調し、左翼は「新しい時代」という記号をサッチャリズムの支配的言説から脱分節化し、みずからの言説へと再分節化しなければならないと主張している。ここでは、ホールのヘゲモニー論についても整理した。

第5章では、ブレア率いるニューレイバーが掲げた「第三の道」に対する、ホールの批判を分析した。さらに、「第三の道」の主唱者であるギデنزによるホールへの反批判を踏まえ、ホールにとってニューレイバーはいかなる意味で、彼の切望した「左翼の刷新」たり得なかったのかを検討した。そのうえで、ニューレイバーとサッチャリズムの連続性を検討し、「ネオリベラリズムの長きにわたる行進」が継続されていることを明らかにした。

終章では、本論文の成果を整理した。そのうえで、「ネオリベラリズム革命」はホール亡き後も続くのであり、それはこれから生きる我々の課題でもあることを確認した。

最後に補論では、ホールの教育論を検討した。そこから、ホール自身も長い間従事した成人教育が、「ネオリベラリズム革命」に対する抵抗実践となり得る可能性を示唆し、本論文を閉じた。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	牛 渡 亮
論文審査担当者	(主査) 教授 長谷川 公一 教授 永井 彰 教授 下夷 美幸 教授 森本 浩一 大妻女子大学教授 正村 俊之
論 文 名	スチュアート・ホールのネオリベラリズム革命論
<p>本論文は、カルチュラル・スタディーズの指導的理論家として知られるスチュアート・ホールの思想的営為をその生涯にわたって跡づけながら、ホールのネオリベラリズム革命論の思想的特質を明らかにしたものである。論文は7つの章と1つの補論からなる。</p> <p>序章では、ホールのネオリベラリズム革命論を読み解くという本論文の基本的な課題が設定される。第1章では、青年期のホールが取り上げられ、社会を経済に還元して説明する教条主義的マルクス主義と、文化を少数エリートの専有物とみなすエリート主義的文化論に対する批判をつうじて、文化の自律性と政治性を重視するホールの思想が形成されたことが示される。</p> <p>第2章では、ネオリベラリズム革命論のさきがけとして、1970年代に提起されたホールのモラル・パニック論が紹介され、その議論をとおして、戦後の「合意」に基づく社会から「強制」に基づく社会へ移行していったことが説明される。第3章では、1970年代から80年代にかけて展開されたホールのサッチャリズム論が検討される。サッチャー政権が「退行的近代化」と「権威主義的ポピュリズム」という二つの文化戦略を採用することによって階級横断的な支持を獲得できたことが述べられる。</p> <p>第4章では、「新しい時代」という、1980年代末にホールが提起した概念を手がかりにサッチャー政権と既成左翼の違いが分析され、サッチャー政権が「新しい時代」における文化の重要性を認識していたのに対して、既成左翼はそのことに失敗したこと、したがって左翼の刷新として「新しい時代」の意味をサッチャー政権とは異なる仕方でも再分節することをホールが期待していたことが指摘される。第5章では、1990年代に登場したニュー・レイバーのブレア政権がホールの期待に反してネオリベラリズム革命の継承者であったことが明らかにされる。最終章では、論文全体が要約され、ネオリベラリズム革命が今日なお継続中であることが確認される。そして補論では、ネオリベラリズム革命に対する抵抗実践としての教育の可能性が論じられる。</p> <p>以上のように、ホールは教条主義的マルクス主義から一線を画すことによって、ネオリベラリズム革命がサッチャー政権のもとでどのように成立し、それが政権交代にもかかわらずどのように継続されていったのかを明らかにした。論文では、そうしたホールの思想的営為が明解かつ説得的に論じられていた。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	